

## 景気対策を医療になぞらえて考える

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

### たとえ話の効用

たとえ話には気をつけないければならない。時に、真意が正確に伝わらず、誤解を生む結果にもなりかねない。しかし、複雑で是非の判断が困難な事象を分かり易くするために、敢えてたとえ話で説明を行うことも、時に有用である。

目下、わが国の経済社会において最大の関心事となっている景気対策について、何をなすべきか、どのくらいの規模が良いのかなどの判断は難しい。概して、景気対策の議論となると、「できるだけ早く、思い切った規模で」という論調一色になりがちである。こうした「空気」が世論として背後に迫ってくる事態になると、ともすれば国の長期的課題への地道な取り組みは中断される傾向にある。此处で、物事をより客観的に眺め、冷静に対処する「ものの見方の工夫」が必要ではないか。それが一面的な見方に陥らない工夫ともいえる。その一例を挙げてみよう。

### 経済を身体にたとえてみれば

わが国経済社会をわれわれの「身体」にたとえ、現下の深刻な不況を全身の体調不良と考えてみれば、景気対策は定めし「医療」に当たるといえる。はたして、名医は患者を診て、どういう点を治療の判断基準とするだろうか。

まず、どういう症状が出ているのか。過去に同じような症状があったか。その真の原因は何か。生活習慣に関係があるのか。どういう治療を選択すべきか。薬の種類と量はどのくらいが適当か。飲み合わせに問題はないか。副作用はないか。治療の効き目は何で判断するのか。どこまで体力が戻ればよしとするのか。年齢はどうか。体力はあるのか。心理面での治療は必要か。自ら治そうという強い意志があるのか。

回復までにどのくらいの期間が必要とされるか、など、ということになる。

こうした視点をわが国経済の現状と景気対策に当てはめてみると次のようになるのではないか。症状としては、株価や地価が下落し低迷している。一部の産業での大きな赤字が続きかねない状況であるので、全般的に重症である。前回のバブル崩壊後の不況と比較してみると、前回は金融機関の不良債権処理が中心課題であったものが、今回は輸出の激減から来る実体経済の落ち込みが著しいので、処方箋に少し違いがあってしかるべき。今直ちに外需依存型の経済から内需主導型の経済へ転換することは、現実問題として難しく、急回復のきっかけが掴めない。症状を治すには時間がかかると見るのが自然。

そもそも、以前の状態に戻すといっても、どういう状態をイメージするのか。もとの状態に戻すだけであれば、またいずれ症状が繰り返すだけではないか。もっとしっかりとした体質になるよう考えるべきではないか。当面の処方として、大胆な財政支出による需要創出や雇用対策が求められているが、将来の財政赤字問題が控えており、その限界が見え隠れしている。よく効く薬も大量に摂ると副作用を心配しなければならないのと同じ。

また、日本はすでにかかなりの成熟社会に入っており、潜在成長力も次第に下がってきている。社会心理面でも飽食の時代に慣れきった弊害が垣間見える。気力が衰えては、治るものも治らない。少子社会の一方で急速な高齢化が進んでいるので、将来の不安が強く、消費行動に慎重さが抜けない。心理的ケアが同時に施される必要がある、など、ということになる。

## 経済と生物としての身体に共通点

このように、経済を身体へのたとえで眺めてみると、驚くほど似かよった現象が見て取れる。それは自然なことではないかと考える。そのわけは、生物としてのわれわれの身体は信じがたいほどの数の細胞からなっているが、それが相互の情報交換によって秩序立って動いているという。そこでは新陳代謝を通じて、生命体としてのやわらかさ、可変性およびバランスが保たれている。われわれを構成員としている経済においても、無数の情報の交換が行われており、それにもとづいて相互依存の行動がなされている。その結果、経済は絶えず動き、変化を見せている。この両者の類似点から、最近、経済問題を理解する際に身体の例が用いられるようになってきたのではないかと思う。

## たとえ話の効用と限界

このように驚くほどの類似点があるとしても、両者を同一視することはできない。それは遺伝子でプログラムされた身体と、構成員が自由意志で行動し、形作っている経済社会とは違う次元のものと考えるべきであり、また、経済における国境の存在なども比較が難しい。その点、両者の比較はたとえ話の域を出るものではない。したがって、「理解を助ける」程度の効用しかない。しかし、身体へのたとえが、日々の株価などの現象にとらわれがちな経済の見方に、そのマンネリ化を打破するための広がりや深さをもたらしてくれることも否定できない。私なりに、特に有効と感じるのは以下のような点である。例えば、経済を全体として見るという、バランスの良い視点を与えてくれる。また、経済の体質改善の問題にも目が向けられる。さらに重要なことは、実感に乏しい複雑な経済事象をより身近なものとして理解できるということである。多くの人々が経済論調について「自分の身に照らして考えてみて、本当かな」と考えるきっかけにもなる。たとえ話の限界をよくわきまえた上であれば、経済をわれわれの身体に、また経済対策を医療になぞらえて理解することも面白い。